

「主イエスの系図」

2023年01月13日

イエスご自身が宣教を始められたのは、およそ三十歳の時であり、人々からはヨセフの子と思われていた。ヨセフはエリの子、それから遡ると、マタト、レビ、メルキ、ヤナイ、ヨセフ、マタティア、アモス、ナウム、エスリ、ナガイ、マハト、マタティア、セメイン、ヨセク、ヨダ、ヨハナン、レサ、ゼルバベル、シャルティエル、ネリ、メルキ、アディ、コサム、エルマダム、エル、ヨシュア、エリエゼル、ヨリム、マタト、レビ、シメオン、ユダ、ヨセフ、ヨナム、エリアキム、メレア、メンナ、マタタ、ナタン、ダビデ、エッサイ、オベド、ボアズ、サラ、ナフション、アミナダブ、アドミン、アルニ、ヘツロン、ペレツ、ユダ、ヤコブ、イサク、アブラハム、テラ、ナホル、セルグ、レウ、ペレグ、エベル、シェラ、カイナム、アルパクシャド、セム、ノア、レメク、メトシェラ、エノク、イエレド、マハラルエル、ケナン、エノシュ、セト、アダム。そして神に至る。（ルカ福音書3：23～38）

主イエスの系図が、ヨセフから始まり、ダビデ、アブラハムを經由して最初に創造されたアダムまで、「そして神に至る」と綿々と記されている。イスラエル人は系図を尊重する。自分が誰であるかを言う時、先祖の名を上げて、アイデンティティを証明するからである。記された主イエスの系図は、アブラハムから2、3代上までは、歴史的人物と考えてよいだろうが、その先は、神話の人物で、とても、実系図とは言えない。著者ルカは、主イエスの系図をヨセフから最初の人アダムまで遡って書いているが、要は、信仰の父アブラハムと、メシアが出ると言われたダビデに繋がっていることを言いたいのであろう。ちなみに、マタイ福音書は下記のように系図を記している。

〈アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブをもうけ、ヤコブはユダとその兄弟たちをもうけ、ユダはタマルによってペレツとゼラをもうけ、ペレツはヘツロンをもうけ、ヘツロンはアラムをもうけ、アラムはアミナダブをもうけ、アミナダブはナフションをもうけ、ナフションはサルモンをもうけ、サルモンはラハブによってボアズをもうけ、ボアズはルツによってオベドをもうけ、オベドはエッサイをもうけ、エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ、ソロモンはレハブアムをもうけ、レハブアムはアビヤをもうけ、アビヤはアサをもうけ、アサはヨシャファトをもうけ、ヨシャファトはヨラムをもうけ、ヨラムはウジヤをもうけ、ウジヤはヨタムをもうけ、ヨタムはアハズをもうけ、アハズはヒゼキヤをもうけ、ヒゼキヤはマナセをもうけ、マナセはアモスをもうけ、アモスはヨシヤをもうけ、ヨシヤは、バビロンへ移住させられた頃、エコンヤとその兄弟たちをもうけた。

バビロンへ移住させられた後、エコンヤはシャルティエルをもうけ、シャルティエルはゼルバベルをもうけ、ゼルバベルはアビウドをもうけ、アビウドはエリアキムをもうけ、エリアキムはアゾルをもうけ、アゾルはサドクをもうけ、サドクはアキムをもうけ、アキムはエリウドをもうけ、エリウドはエレアザルをもうけ、エレアザルはマタンをもうけ、マタンはヤコブをもうけ、ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。（マタイ1：1～16）

マタイ福音書は、ルカ福音書とは逆に、アブラハムから主イエスまでの系図を書いている。両福音書の系図には不一致なことが多く、歴史的根拠を確認することはできない。主イエスは、アブラハム、ダビデに連なる系図の中にあると力説している。